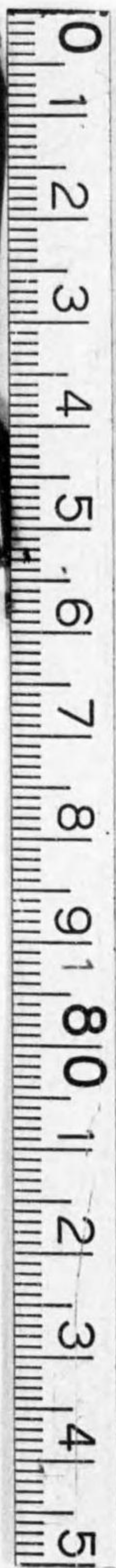


鈴乃音

特257

124

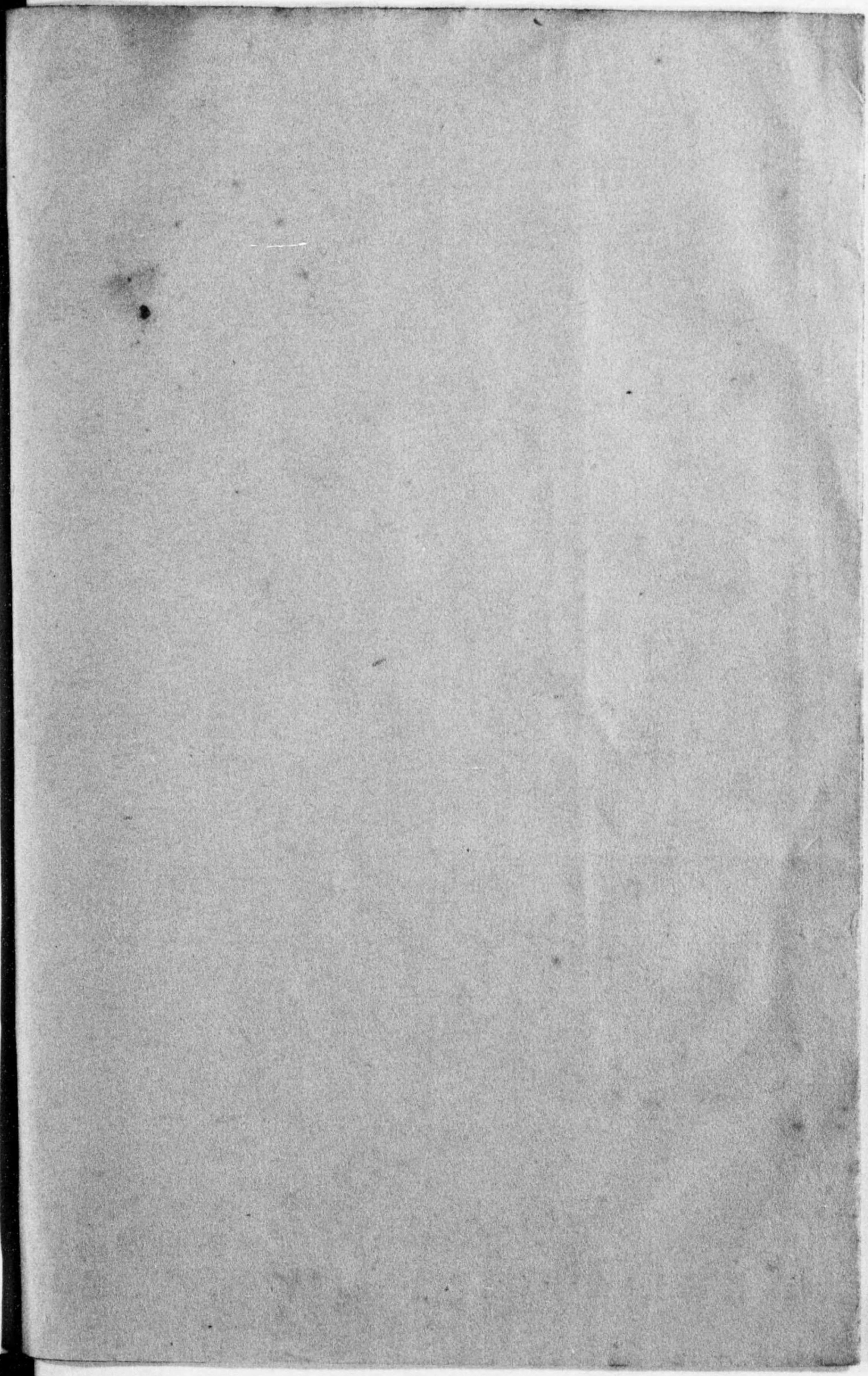


始





特 257  
124





北村を  
よむ

真珠の

いふ

七

かみの結を

早の

か

おね子



昭和三年

三月

十日

鈴の音

鈴木よね子詠

○春の部

早春眺望

朝けふりすゑはかすみて初はるのけしきとなりぬ遠の

氷不解

はる來れど風またさむき諏訪の海こほりすへりや樂しかる覽

山霞

春けしきかすみて見ゆる摩耶の山續く武庫山見れはのとけし

同

うちよするなみも靜に春めきてかすみたなひく沖つしまやま





海邊霞

春風は枝もならさてはまのまつかすみく〜てなみしつかなり

同

風たえて霞たなひくいそつたひまつより外はみえぬのとけさ

若菜

池水に結へるこほりどけそめてけさはのどかに若菜つむなり

同

わか門の野邊には残る雪もなしいたち出て、若菜つまなん

雪中若菜

今朝見れは雪間に清きせりなつないさつみためて君に捧けむ

月の瀬の梅見に物して

こゝかしこ枝移りしてうくひすも香にむせふらむ月の瀬の梅

柳邊風

青柳のいとなつかしき立すかたみたさぬほどにはる風のふく

門柳

朝夕の姿なつかしかどにたつやなきのいどのしなやかにして

雨中柳

春雨はしつけかりけり糸やなきいどのひやかに軒にかゝりて

苗代

しめなはをひきて清むるみとしろの日ましに青む小田の苗代

菜の花

この頃は家のうちまで香るなりこかねのいろになの花のさく

若草

うつくしくはやもえいて、淺茅原一つみどりに見ゆるはる草



春風

いかのほり遊ふうなひの心をはそらになしたりはるのあさ風

春野

おしなへて春の心はいひしらすのとけかりけり野邊の夕くれ

若草

里の子とつみにいつれは春草のみどりはてなく野は霞むなり

野中に子供の遊ふを見て

春草をふみて遊へるうなる子のいはげなきさま見るか楽しさ

山吹

美しくかつはやさしと見ゆる哉こかねのいろにさける山ふき

池邊山吹

朝日さす今をさかりの山吹のつゆはこほれてにほふいけみつ

岸山吹

水の上にさきみたれたる花の色みるもやさしや岸のやまふき

待花

さきなはとをゆびを折りて山櫻こゝろなかくも我はまちけり

同

暖けき風ふけかしとひたすらにはなをまちつゝけふも暮しぬ

彼岸櫻

み佛にたむくる櫻さきぬとてはやくも兒らのをりてけるかな

初花

朝庭のそゝろあるきにめとむれは初はなさけり池のつゝみに

同

春くれは高根のゆきはまたきえ傳ふもどははやも初花のさく



花盛

花の香のみちあまりたる盛りにはその下かけの風のえならぬ

庭花

庭をゆくあし駄の音もいとへるをはなのさかりに夜嵐のふく

春の日嵐山に遊ひて

大井川たのしみ多きはなさかりあらしの山はみつにうつりて

同

見るたひにめてらるゝ哉あらし山花の頃にはみつもかをりて

月前花

うちしふく瀧のこなたの山櫻おほろつきよにしろくどみゆ

落花

ちるとしる櫻なからもしかすがにさそふ嵐のにくゝもある哉

春山

高からす低からすして樂しけに子らのあそへる春のやまかな

同

そま人の薪にはなををりそへていへつと多きはるのやまかな

春海

のどかなる須磨の海邊にいてて見れは釣舟おほし春の風ふく

春月

春の夜はくもるともなく曇るなり花の上ゆくつきのみかりも

同

かすめるははるのならひとおほろなる影も哀れに月そ空ゆく

日長

長閑さに野山たどりて遊ひけり日長きけふもたらぬはかりに



○夏の部

杜 若

うちにほふこき紫のかきつはた池のこゝろもふかくみえたり

牡丹

はさみもてあれよこれよと花園にきりこそまどへ色ふかみ草

老 鶯

ふる里の青葉かくれに老ぬれど聲なつかしくうくひすのなく

蚊 遣 火

夕こりの雲かどみれは山本に蚊やりたくらしみわたしのさと

梅 雨 久

日をあまたふる梅雨にはしくちて木樵の道もたゆるたにかは

入梅になりても雨ふらす

ことたらぬおもひこそすれつゆなから庭なる瀧の音も聞えす

早 苗

早苗とる田歌にきはしどりくにくるゝもしらぬ里の早少女

籠のほたる

手にさけて背におはれつゝねたる子の夢路をてらす籠の螢哉

谷の卵の花

此ころは盛りとなりて卵の花の谷間につもるゆきどこそみれ

山路卵花

雪どのみおもふはかりの卵の花に通ふ山路はくるゝともなし

初ほととぎす

そま人の音にましりて珍らしや谷をへたてゝきくほととぎす



同

何方をさしてゆくらんほとゝきす初音めつらし雲のあなたに

百合

朝露にうるほひなからうつむきて恥しけなるひめ百合のはな

若竹

いつの間にかくは生ひけむ此夏はかけしけりゆく今年竹かな

朝顔

朝またきつゆにうるほふうつくし涼しき色にさけるあさ顔

同

きのふより花かす多くさきにけり隣さかひのかきあさかほ

夕かほ

行てみむ涼みかてらに夕顔のこゝちよけにもさけるそのふに

夏草

里近き野邊のほそ道いつの間に閉ちはつるまでしける夏くさ

池蓮

夕立のあめのすきゆく蓮池になこりのつゆのたまそのこれる

同

水あさき野寺の池のはちすはの上にかはづのあめをよふなり

雀巢を出つ

朝すゝめ小笹の枝にちよゝとひなを教へてすたちするらし

同

軒端にて千代よひかはし子雀もつはさならして巢立そめけり

雲峯

あやしくも空に重なるくものみねくつれはしめて夕立のふる



夏 川

まなひやの夏の休みにわらはへか泳きおほゆるおのかさと川

夏 簾

てりつゝく軒にかけたるいよすたれ風ふく毎に揺くすゝしさ

夏 朝

夜の蚊とひるの暑さにひきかへて風こゝちよきなつの朝かな

同

朝戸いつる軒端の風の涼しさにひるのあつさぞ思ひやらるゝ

同

早おきはいと心地よしわか庭のあさつゆをふむ夏くさむしろ

夏 夕

風渡るはるのなこりの葉さくらのかをりすゝしき夏の夕くれ

同

風そよく夕かは岸のやなきかけ小舟うかへてあそふすゝしさ

同

山のはに日はかたふきてわか庭の葉わけの風そゆふへ涼しき

夏 夜

打水の露さへいまたかはかねは月にきらめき夜はあけむとす

川 夏 月

はやせ川水にうかへる涼しさのひかりくたけて月そなかるゝ

閏 夜 月

夏の夜はねられぬまゝに明けはなち閏の奥まで月さしいれぬ

夏 月 涼

里川の木立にそひて流れ来るみつおとすゝしつきのひかりに



夏 川

あつき日も流れにそひてゆく水の音のすゝしきなつの川ばた

夏 瀧

み空よりおつるいきほひ夏さむくしふきにこもる瀧つ白なみ

繪

たきのゑをみても涼しき心地しておちくる水の音もきくへく

海邊夕立

夕立に海邊の里のさはかじさいわしほしたるむしろどりいる

同

土佐ごまりみそらははれて涼しくも鳴門の沖を過るゆふたち

夕立涼

こゝろよくふりたらひたる夕立の晴れゆく跡そ涼しかりける

野夕立

かきくれて雲あしはやしみるが内に野邊うちすぐる夕立の雨

夕立ふりかみ劇くなりて

蚊帳つりて内にぬれども稻妻のひかるまおそしとなり響く哉

岐阜提燈

かはかせにゆられくゝて涼みふね岐阜提燈のほかけすゝしも

海邊納涼

そよくゝと磯うちよする浪風にはま邊すゝしき夏のゆふくれ

船中納涼

舟漕けはゆふ風渡るさゝなみにつきもくたけて涼しかりけり

短夜

ゆめもみすうつらくゝとまどろめははや曉になりぬみじか夜



氷店

日さかりの柳の下のこほり店手にもつあふきわすれてそたつ

柳下氷店

ひさかりは岸の柳のかけすゞしましてこほりをひさく店あり

同

日さかりに雪やあられの音しけく柳のかけのはやるみつみせ

同

見るからに柳の下のすゞしさよこほりの店にひとのたえせぬ

泉

道のへの清きなかれに袖ひちてむすへはすゞし夏の日さかり

同

音きけはいそく道にもたちよりてむすふ嬉しき岩しみつかな

同

月かけを袖にやとして道のべの岩こすしみつくむそすゞしき

松下泉

行かはやな松の木かけの岩清水すゞしかるらむなつを忘れて

扇

いつみてもたゞしき姿みするかな夏のあふきは人のめつなる

夏終

夕風になつも末野の川つたひすゞしきおとのみつにきこゆる

同

秋ちかみつゆみえそめてきのふけふ庭涼しくも夏くれむどす



○秋の部

朝露

木はさみはもちてあれども花畑あさつゆしけみ立いりかねつ

萩露

朝露にけふさきそむる萩のはな袖はぬるとも折りてかさゝん

秋草露

あさなく秋草におくしら露はかせになひきて玉どちりけり

同

なつかしき花さく頃はをみなへししどゝにおきて露も色あり

月前のすゝき

さご人のかり残したるむらすゝき淋しくつきの宿るころかな

花野

朝またき秋のならひとしめりたるつゆ草の花いさ手折らなん

折にふれて

遠近をめぐめてみればたゞ一木秋にさきたちはきのはなさく

コスモス

やどかへにとり残されて淋しくもこすもすめたつ秋の暮かな

折にふれて

植木屋のつこふはさみの音さえて庭のこすゑに秋はきにけり

月前眺望

なかめやる紀の路の山は遠けれどなみも静につきにみえゆく

月見

ふくる夜に秋風そよどおくりきて笛の音たかし月さえわたる



池の月

わらべらか石をなけたる池の面に月は碎けてひかりちるなり

松間月

たち並ふ松の木の間に月さえてゑにかゝはやと思ふふくる夜

月照衣

どりいるゝこと忘れたるさを竹の衣にてれりあきのよのつき

月前虫

何となくこゝろしつかにふくる夜は虫の音高し月もすみゆく

月下虫

秋の野はいとさひしけにくれそめて月まつ虫の聲あはれなり

鈴虫

神垣にたか拜むらん音のしてきよくきこゆるもりのすゝむし

田上秋風

かりはてゝどふ人もなき小山田のさひしくなりぬ秋のゆふ風

稲妻

いなつまの時々てらす夕やみにおく露さへもさやにみえけり

夜雁

はたさむき嵐のかせのみにしみてふけゆく空に雁かねそする

かゝし

小山田の千まちの稲をかりほしてかゝしそのまゝ哀れ残れる

虫干

ふり袖の虫はらひしてひたすらにありし昔ぞこひしかりける

秋夕

そま人のかへる山路のさひしくてあはれは深しあきのゆふ暮



秋 雨

雨毎に紅葉いろそふ秋のきてみやまをてらすゆふ日まはゆし

秋 山 遊

見渡せはあきおもしろし遊ふにはうす紅葉する山にゆくへし

同

けふもまたうちむれて遊ふ里の子の落くりひろふあきの山中

同

おもふどち秋のあそひと来てみればみ山はうさのすて處かな

栗

風ふきぬ今や落つらんとむらの子か籠たつさへてひろふ落栗

同

秋風のふきのまに／＼いか栗のわれてこほれて落るやまみち

澁 柿

山さこのあきの名残のしふ柿はいろうつくしく霜にあからむ

社 頭 鹿

いつくしまけしき珍らしどり居まて干汐たつねて鹿の遊へる

鹿

くまもなくさゆる月夜にさを鹿のつまどふ聲の哀れなりけり

秋 の 庭

何となくむしの音さへも哀れにて淋しきものは秋のにはかな

同

あきの来て涼しくなりぬわか庭はむしの音高く夕くれにけり

同

夕かせに松の古葉をはらはせて庭の木の間につきぞもり来る



河 霧

いつもみる岸の柳はみえさりき河つらふかくきりのへたてゝ

朝 霧

風なきに舟のゆきゝものどかにて朝きりふかし武庫のうな原

庭 菊

色も香もまかきにこそはあまりけれやみにもしるき庭の白菊

菊盛り久し

きのふよりけふは花かすいやまして菊は久しく樂しかりけり

蔦 紅葉

心ある人のめつなるあき山にけしきをそふるつたもみぢかな

同

はふつたは秋をふかめて時雨降る野中のほこら紅葉しにけり

同

時雨してあきふかくなる山本のまつにかゝれるつたもみぢ哉

初 紅葉

かすくゝの中に珍らしたゝ一木しくれにいそく初もみぢかな

紅葉 浅

小春日にやま路たどりてゆく道もさすや朝日に薄もみぢしぬ

初 紅葉

鉢植もあきをしらせてくれなるに匂ふやさしき初もみぢかな

山 紅葉

そま人の珍しからすみる山もおもはぬ木々のもみぢしにけり

近江の日吉神社に参りて

神垣にぬかつき居れはいろ深きもみち嬉しなぬさどちり来て



わらやにつたはひかゝれり

山寺のくりのわらやね錦してつたのもみち葉いまさかりなり

秋 雨

あはれなり月もかくれて何となく寒きゆふへに秋のあめふる

○冬の部

時 雨

さためなくそらはくもりて此頃はしくれかちなるよもの山々

同

山里は風にきほひてはらくと木の葉ましりの時雨をそきく

昭和二年明治節を定められて観艦式を行ひ給ふと

きよて

豊なるみよのためしといくさ船多くならへてきみみそなはず

櫻の返り咲きをみて

うゑこみに數ある中のたゞ一木小はるのはなのさくか珍らし

枯 尾 花

みし秋のなこりなりけり枯尾花たてるさひしき冬の野らかな



同

里川のつゝみあゆみて見渡せは尾花かれふす野邊のさひしさ

枯野

きのふまでみし秋草もかれはてゝ霜のはなさくふゆそ淋しき

枯芦

吹く風を涼しどみてし池水にかれふすあしののこるわひしさ

板屋霜

大空のさゆる夜に霜おきてあさ日にけふる板ひさしかな

同

風さむく朝日みぬまのしもはしら雪にもまかふ板ひさしかな

霜ふりて朝寒し

珍らしく雪にもまかふ板ひさしすゝめのあどのみゆる朝しも

庭のあられ

わか庭の時雨の風にさそはれてたもとにさわく玉あられかな

初氷結

くみおける手桶の水のよをさむみ今朝めつらしく氷そめたり

厚氷

山住はさひしきものときゝなるゝ筧おとなしあつこほりして

朝氷

くみおける手桶の水は此朝けかゝみのことくこほりけるかな

みそれ

布のそてみそれにぬれて炭うりかうしひきつるゝ夕暮のみち

水鳥

河そひの柳のかけに一つかひをしそねむれる繪にかゝまほし



同

いつみてもつがひはなれぬをし鳥の浮寝やいかに陸しけなる

浦千鳥

浦つたひたもどをかへす濱風もみにしむはかりなく千鳥かな

朝雪

風もなくしつかにつもる夜の雪今朝みる木々は花をあさむく

雪ふる日子供學校に行く

子等はみなかさをも持たて學校にゆきを樂しと勇みつゝゆく

舟上雪

門かはおきいてゝみれば北風にきしの捨舟ゆきふりつもる

朝雪

うなる子よまなひに通ふ雪の道ふみあやまたす一すちに行け

同

静けさに戸あけてみれば眞白にてちりだもみえぬ今朝の初雪

遠山雪

學ひやに通ふおもひ子見送れははや遠やまにはつゆきそふる

同

内日さすみやこに遠き北國のやまのはしろくゆき降りつもる

雪中牡丹

日當りのよきところどて來てみればわらを被きて深み草さく

同

北風に雪もましりて深みくさおほひを透きてにほひいてけり

山茶花

鉢もちおりたちぬれといま更に切りそわつらふにはの山茶花



早梅

春をまつうくひすさへもしらさらむ雪間ににほふ梅のはつ花

同

珍らしや南おもての窓のむめはるのこなたにわらひそめけり

埋火

おもふどち火おけかこみて語りあふ冬の夜頃ははやふけに鳧

冬夜

空寒く月すみ渡るふゆの夜はひとめもかれてしもそおきける

年のくれ

老の身の弓どかゝめるはづかしさ矢よりも早く年をすこして

同

年老てあけくれつくるわか歌をせめて一ふてのこしおかなん

同

師の言葉わすれまじとて一筋に老てもまなふしきしまのみち



○雑の部

玉

むらきもの心をきよく磨きなは玉のこどくにかゝやきぬへく

帯

新よめのまたはつかしき振袖もはやいそかるゝいわた帯かな

衿まき

明け方の寒さはこどにみにしめは衿巻をしてまたねをそする

衣

たらちねのはゝの手織の古衣にしき着るよりうれしかりけり

髪

少女子かたしなみにごて黒髪を結びあげたるうつくしさかな

櫛

朝夕に手ならずつけのさしくしは情のふかきはゝのたまもの

鏡

あさ夕のおのか心をたちむかふかゝみにかけて寫してしかな

かるた遊び

たからかに歌ふかるたの上の句の終らぬさきにはやる少女子

筆

ほの長き筆の命毛きれたれど書きなれたるはすてもえやらす

杖

老ぬれは世をのがれたる心地してつゑを力にてらまうてしつ

槌

雨ふれはのらにもいてす田人らかわらうつ槌の音そきこゆる



香 水

柳かけなまめきたてるをどめ子のゆく／＼にほふ香水のよさ

時 計

おもふとちつきぬ話に小夜更けてうつや時計の音におどろく

同

何ことも時計ごとにもすゝみなは心のはりもおくれさらまし

曉 鐘

小夜ふけて暮を圍みをれば曉のかねの音にそおどろかれけり

タ ワ レ

水しめか手なれのたわしよく馴て何時も濡つゝ乾くまそなき

た ら ひ

手たらひのくみおける水に有明の月のおもはのうつりける哉

苔

たかすみて敷奇をこらせる庵ならむ庭の苔生のうるはしき哉

同

あれはてゝたかすみ残す庵ならむ苔のむしたる石たゝみかな

起上り小法師

轉かせと轉かせとまた小法師の起き上るこそ雄々しかりけれ

虹

ふりやみて空には虹のかゝるなりあめの名残のうつくしき哉

同

あめ風もやみて舟こく夕まくれはまへの空ににしのたつみゆ

雷

どゝろきてつひに落ちけり鳴神の松の大木にあどをのこして



星

日はくれてはれわたりたる大空にひとり輝くゆふつゝのかけ  
星をみて

心

すまる星の影をたよりに大海原やみよにわたる舟ひとあはれ  
よき事をきく度毎に忘れしところのそこにゑりておかなん

昔

誰もいふよは様々にかはれどもむかしの人のゆたけさをみよ  
夕

折にふれて

波の上を雲のけしきに急かれてかへる小舟にゆふあらしふく  
はりつめて心の弓をひく老のたゝひとすちに家をこそいのれ

夢

つかれてはぬるごしもなきうたゝねに晝の事共夢にみるかな  
夢見故人

茶室雨

ゆめの中に昔の人と語りあひてさめての後そことにわひしき  
切炭のにほひはみちてあられ釜あめどそおもふ松かせのおど

旅宿

びたやかたあたりをみれば古里の都ににたるやまはなつかし  
ひかうき

同

みをかるく西に東に音たてゝくもをわけつゝすゝむひかうき  
今朝もはやみそらにたかく音たてゝ走る飛行機軽けなりけり



かたつむり

雨はふり風はふけどもかたつむり心やすしやいへをせおひて

蟹

きよおよふ昔語りの平家かにうみにこゝろをのこすなるらん

蟻

何すどかいそかはしけにありの道たゞ一筋につらなりてゆく

雀

ちよくど軒端の竹にこゑのしてひなをはくゝむ朝すゝめ哉

さ

ぎ

すて舟のへさきにいこふ白鷺の何をおもふかうちうなたれて

鴉

うちむれてねくらに歸る夕山のからすの聲そいかにわひしき

同

深山木のかれたる枝になく鴉になけくらんきけはわひしも

う

ま

いさきよき駒の音たかく遠乗りのあしなみはやしなはて松原

牛

いそしみてのらのかせきに日はくれぬひかれて牛も歸る頃哉

猫

いつくしむ主の心になれくゝてひさをはなれすねむる猫かな

同

流しもあるゝ鼠はしらさらむ猫はひそかにねらひ居るごも

同

いはけなく子ねこの遊ぶ様みれは我もおもはすうちまもり鳧



犬

杖つきて山路ゆく日もかひ犬は遅れさきたち尾ふりしたかふ

猿

嵐ふく峯の木すゑにましらなく聲あはれにもきくかさひしさ

同

山風のふきすさむよの淋しきにうゑたる猿のこゑあはれなり

並木

いつみてもいろはかはらて海中の並木うるはし天のはしたて

松

千代かけてたちさかえたる高砂の尾の上のまつの美しきかな

若松

しけりあひて木こりの道やせまからむ立ち並ひたる若まつ林

同

鶴のすむ池のみきはにうつしうゑて榮えをまたん千代の若松

海邊松

いつみても面白きかな枝たるゝ舞子のはまのまつのみらたち

折にふれて

手をとりて子を歩ましゝ親の身も今はひかれてよを渡るかな

同

すこやかによはひは長く樂みておのかこゝろを廣くもたなん

茶席に招かれてよめる

はき清めゆきどゝきたる露路ゆけは軒はに梅のかほり床しも

同

さくら炭かをりはみちて松風のおどきよらかに心地よきかな



西宮夷神社に詣つる道のほどにて

年たちてまだ色そはぬ武庫山もなにどはなしに氣色のどけし

別府にて

旅宿の朝戸あくれはうくひすの聲ほからかにはつねもらしつ

同

あさなくおどつれて来る鶯の日ことく／＼にふしなれてなく

豊後の竹田のうをすみの瀧にて柳田ぬしが

「みても見あかぬうをすみの瀧」として上

の句をどいはれければ

水きよくそこのさゝれもみえすきて

折にふれて

春雨のしつる、枝に風そひてかみをあらふと見ゆるあをやま

わか庭に鶴鶴の遊ふをみて

あさな夕な来るがやさしき石たゞき靜に遊べにはのしはふに

ある日何を思ひける折にか

高畑ののどけき空に千代よはふ田鶴の聲こそめてたかりけれ

同

まな鶴の聲高はたにきこえて千代に八千代と祝ふうれしさ

ふくろうの來てあけ方になく

いつの間にこゝにきつらむふくろ鳥明方近くなけはこそしれ

震災地に物を送るとて

たれにともさす方はなし我心こめてふくろをおくりこそすれ

ある人より鮎をおこせ給ふ事の嬉しさに

みめくみの鮎のかほりそたくひなき君か心のなつかしきかな



大高氏より汐千狩りの家つとにとて  
蛤をおこされければ

汐千狩りいへつとにとて珍らしく籠にあまる迄貫ふはまくり

大高氏よりまた宇治に行きたりとて

ほたるをあまた給はりたるかへしに

いへつとにまた給はりてみめくみの光嬉しきこのほたるかな

近き家に琴音のきこえければ

面白くたが調ふなる琴の音かそれかあらぬか須磨のうらかせ

外國へ行く人を送りて

海こえて外國までもゆく舟のあとのけふりもなみたなりけり

昭和二年の夏半年はかり店に行かさりしが

事についてに立ちよりたれば今は人の數も

少なくていごさひしくなれりければ

きのふまで狭しとおもひし我店の何どはなしに物のさひしき

同

何ごなくものゝ淋しく思はれてあはれにのこるわかすゝり箱

哀 傷

雲はやくゆくての空はかきくれてたもどしどゝにうち時雨梟

昭和元年の冬服部鈴子刀自のなくなり

給ふをかなしみて

ありし世を思ひかへせは朝夕におのかたもども露にぬれけり

同

すぎし日にあたへられたる寫しゑの面影見ればいごゝ悲しも

同



君と共に歌をならひしおもかけを忘れもやらて淋しかりけり

同じの一周忌に手向けまつる

かそふれははや一年になりぬるかみぬめの浦の名そ恨めしき

同

おのか身もあすを知らねど別れてははや一年をおくる淋しさ

河水清

水清みむすへばいつも心地よしなかるゝ川はちりもたまらて

海上風静

朝日さす海路は風もしつかにて沖のふねの帆うこくともなし

同

塩けぶり静かにはれてあさかせにふねみちつゝくむこの海原

山色連天

朝日かけほのくみゆる高千穂の山は雲居につゝくかと思ふ

晴天鶴

雲もなきそらより歸るあし鶴を松のこすゑのひなやまつらん

祝皇子御降誕

九重の御庭のまつに巢こもりてけさひなつるの初音きくかな

昭和二年の夏大島に行幸ありと承りて

たつなみをいとひもまさて出てまじに離れ島までみいつ輝く

同

大君のあら海こえていてまじにたみのよろこふ小笠はらしま

婚姻祝

二本の松は八千代といくはるを變らぬいろにたちさかゆらん

同



松竹のよはひはなかし行く末は月日ごともにさかえますらん

寄松賀

常磐なる松のみどりはいやましに杖もたのまで千年へまさん

寄菊祝

むかしより今に榮ゆる菊のはな盛りひさしきこゝのへには

安産を祝ひて

指折りてさすしほ時を待つうちに遙にもるゝひなつるのこゑ

大高氏より喜壽春といふ歌の巻を

いたゞきて

やすらけく松もろ共に榮えますよはひうれしきよろこひの春

七十になりける春に

あまた年かさねてすめる廣庭にあそへる龜とよはひくらへん

同

眞鶴のこゑをきゝつゝ七十路になゝの數そふわか世うれしも

鈴の音

終



318  
332

昭和三年六月一日印刷  
昭和三年六月五日發行

編輯人 鈴木 よね

印刷者 谷口 黙次  
大阪市北區堂島上三丁目

印刷所 谷口印刷所  
神戸市東須磨町

發行者 鈴木 よね



終

